分野・専門名：　映像一般

試験科目：　映像一般

【正解・解答例】

問 1

（1）正解の要点：映像作品における物語と空間の関係について、基礎的な知識、思考力、論理的文章力が十分あるかどうか。解答例の概略：映像作品において物語と空間の間には多様な関係がありうる。例えば、ボードウェルとトンプソンが論じるように、多くの古典的ハリウッド映画では、空間がもっぱら物語の一部として機能している傾向（もっといえば、空間が物語に従属している傾向）が強いが、小津安二郎の『秋刀魚の味』などでは、空間が、あるショットの視覚的構図（ミザンセン）と続くショットの視覚的構図（ミザンセン）の類似に基づいて構成されている点で、物語的な原則だけでなく詩的な原則に従っていると捉えることができる。

（2）正解の要点：映画史における上映形態・視聴形態について、基礎的な知識、思考力、論理的文章力が十分あるかどうか。解答例の概略：映画は、特定の場所に建設された映画館の中で、そこで上映されている作品を、固定された椅子に座ってじっくり鑑賞するというイメージが強いが、歴史的に見れば、それとは異なる上映・視聴のあり方がさまざまに出現してきた。1890年代後半のエジソン社によるキネトスコープは個人個人がレンズを通して覗き視る形式のマシーンで既存のパーラーなどに設置された。1950年代にはアメリカなどで、都市の郊外化を背景にドライブインシアターが登場し、屋外で車の中から映画を観る形が流行した。21世紀に入ると、デジタルメディアの普及とともに、DVD のみならずストリーミングサービスを利用して、個々人がパソコン上で観る見方が広まり、映画館の減少にも繋がっている。このように、映画の上映・視聴は、観る場所と空間、個人か集団の違い、テクノロジーの発達、社会的文脈などとの兼ね合いで、歴史的に多様なバリエーションが生まれてきたことがわかる。

（3）正解の要点：映像とイデオロギーの理論について、基礎的な知識、思考力、論理的文章力が十分あるかどうか。解答例の概略：1970年代に哲学者ルイ・アルチュセールの「イデオロギー国家装置」の影響のもと、欧米の映像理論でイデオロギー論が席巻し、映画が中流階級中心主義、男性中心主義、白人中心主義、欧米中心主義のイデオロギー装置として論じられることが増えた。映画を西洋合理主義のイデオロギー装置として論じたジャン＝ルイ・ボードリや古典的ハリウッド映画を男性中心主義のイデオロギー装置として論じたローラ・マルヴィはその典型例である。いずれも重要な点は、イデオロギー論は、単なる表象分析ではなく、観客がその観る行為を通じてイデオロギーの主体に必然的に位置付けられると想定しているところにある。（受験者の解答は、問題文にあるように一つの理論の説明だけで十分だが、具体的にわかりやすく説明できているかどうかが一つの評価ポイントとなる。）

分野・専門名：　映像一般

試験科目：　映像一般

【出題の意図】

問１は、映像分析、映像史、映像理論の３つの系統の問題からなり、これらの中から受験者に２つの系統を選んで答えてもらうことにより、映像学に関する知識と思考力が大学院入学に値するだけのレベルに到達しているかを計ることをねらっている。

（１）物語と空間の関係という、映像分析にとって重要な観点を例に、映像学に関する十分な基礎的知識と思考力があるかを計ることを目的としている。

（２）映画の上映・視聴という、映画史にとって重要な観点を例に、映像学に関する十分な基礎的知識と思考力があるかを計ることを目的としている。

（３）映像とイデオロギーという、映像理論における重要な議論を例に、映像学に関する十分な基礎的知識と思考力があるかを計ることを目的としている。

分野・専門名：　映像学

試験科目：　映像学

【正解・解答例】

問 2

（1）正解の要点：著者による Paul Langmore の議論の要約を正確に理解する能力があるか、またそれを自分の言葉でわかりやすく表現する能力があるか。解答例の概略：映画において、障がい者は悪役として描かれて物語の最後に退治されるか、もしくは向上心のある人物として描かれ、障害を克服したり、周りの人たちのために犠牲死したりする傾向がある。

（2）正解の要点：著者によるクリップ理論の説明を正確に理解する能力があるか、またそれを自分の言葉でわかりやすく表現する能力があるか。解答例の概略：クリップ理論は典型的ではない身体、精神、行動に注目する批評理論の一つであり、健常者対障がい者といった二項対立を批判的に検討していくものである。より具体的には、能力のある身体や精神（つまり、健常者中心の能力主義）が自然化されている過程や様相や、中心にあるべき障がいが、議論や空間から排除されてしまっている様相を明らかにする。

（3）正解の要点：著者による Martin F. Norden の議論の要約を正確に理解する能力があるか、またそれを自分の言葉でわかりやすく表現する能力があるか。解答例の概略：著者によれば、Norden は、主流メディアにおける身体障がい者の表象を列挙する中で、その表象が他の表象から切り離され、孤立したものとして観客に経験されていることを指摘している。それは、障がい者の文化やコミュニティに注意を向けない社会的・文化的傾向を反映するとともに、そうした状況を継続させる要因ともなっている。

分野・専門名：　映像学

試験科目：　映像学

【出題の意図】

（1）第1段落の英文を正確に理解し、それを自分の言葉で表現できる能力があるかを判定する。

（2）クリップ理論に関する著者の説明を正確に理解し、それを自分の言葉で表現できる能力があるかを判定する。この概念を理解するために必要な知識を計ることもねらっている。

（3）第3段落の英文を正確に理解し、それを自分の言葉で表現できる能力があるかを判定する。

分野・専門名：　日本文化学

試験科目：　　文献解読

【正解・解答例】

評価の観点

［1］

- 文献の内容を適切に理解しているか。
- 要約は適切な文章でわかりやすく書かれているか。

［2］

- 用語、時代背景、文学史などについて、関連する知識を有しているか。
- 指定したキーワードを適切に用いているか。
- 解答の文章は論理的・説得的に書かれているか。
- 文献の内容を踏まえながら、異なる観点や新たな見解、適切な批判などを提示できているか。

【出題の意図】

［1］ 文献の内容を適切に理解し、自身の言葉で表現する力を評価する。

［2］ 関連する知識の有無、および自身の言葉で表現する力、文献を批評的に読む力を評価する。

分野・専門名：　　日本文化学

試験科目：　　論述問題

【正解・解答例】

評価の観点

［1］

- 出題の意味を適切に理解できているか。
- 用語、時代背景、文学史などについて、関連する知識を有しているか。
- 解答の文章は論理的・説得的に書かれているか。
- 解答に独自性はあるか。

［2］

- 用語、時代背景、文学史などについて、基礎的な知識を有しているか。
- 解答は適切な文章でわかりやすく書かれているか。

【出題の意図】

［1］ 問題文に含まれる用語を適切に理解した上で、自分自身の知識を用いて適切に例示を行い、説得性・独自性をもって論述できているかを評価する。

［2］ 文学史、批評理論についての基礎的な知識の有無、回答を適切な文章で記述する力を評価する。

分野・専門名：　文化動態学

試験科目：　専門試験

【正解・解答例】

特定の正解はありません。出題テーマにそって、問題設定、論述、意義について、論理的に構成し表現する能力を評価します。

分野・専門名：　文化動態学

試験科目：　専門試験

【出題の意図】

文化動態学に関連する領域の知識にもとづき、問題設定、論述、評価について、論理的に構成し表現する能力を問うものです。

分野・専門名：　ジェンダー学

試験科目：　専門試験

【正解・解答例】

問１　学校、職場、医療、行政など多様な領域で整備されている福利厚生制度は、本人からの申請を利用条件としているが、LGBT 当事者の申請には、セクシュアリティやジェンダー・アイデンティティの自己表明（カミングアウト）を伴うという特徴がある。このような申請行為は、制度上は中立的な手続きとして想定されているものの、実際にはカミングアウトという、一定の社会的リスクを引き受けることを意味しうる。したがって、制度の存在それ自体をもって「利用しやすい」と評価するのではなく、申請可能な主体がどのような条件のもとで成立しているのかを検討することが望ましい。制度の存在や整備と、当事者にとっての実際の利用可能性とのズレや緊張関係を、構造的な問題として論じることが求められる。

問２　ポストフェミニズムには、さまざまな見解が存在している。たとえば、フェミニズムの終焉や否定としてではなく、フェミニズム理論で用いられてきた「自由」「主体性」「選択」といった語彙が、ネオリベラリズムという特定の社会的条件のもとで再編成される現象を捉えるための理論であるという理解が挙げられる。あるいは、ジェンダーの社会構築性や権力への問題意識といった点でフェミニズムとの連続性を認めるという見解がある一方で、不平等を構造的問題として捉えるか、個人の選択として回収しうるものとして捉えるかという点でフェミニズムとの断絶が存在するという見解もある。他には、ポストフェミニズムをフェミニズムの「継承」や「反転」としてではなく、批判的契機が脱政治化された内在的変容として理解する立場などが考えられる。

問３

問われている具体例は国内外に多数存在する。一例を挙げると、日本では戦後、経済的メリットの追求を一因に性別分業に基づく社会制度が構築され、生計を維持しうる雇用について他国に比して長い労働時間が求められたり、需要やニーズに即した保育所が不足する等した。こうした状況下で特に女性の雇用者は、出産や育児をめぐりハラスメントを受けたり、出産の時期・回数について困難を抱えたりしやすいことが指摘されている。

分野・専門名：　ジェンダー学

試験科目：　　専門試験

【出題の意図】

【出題の意図】

問１　ジェンダー、セクシュアリティに関する事象についての知識を問う。また、それらに対し、論理的な議論を展開する力を測定する。

問２　ジェンダー、セクシュアリティに関する理論についての知識を問う。また、それらに対し、論理的な議論を展開する力を測定する

問３　近年人口に膾炙するようになった「リプロダクティブ・ヘルス/ライツ」についての理解度を問う。また、「リプロダクティブ・ヘルス/ライツ」が保障されていない原因・理由の解説を通じ、ジェンダー・ジェンダー学に関する知識、思考力等、ジェンダー研究の遂行力を試す。

分野・専門名：　メディア文化社会論

試験科目：　メディア文化社会論

【正解・解答例】

問 1

A) algorithmic governance アルゴリズム統治

アルゴリズム統治においては、国家や制度的権威だけでなく、プラットフォーム企業が用いるアルゴリズムが、情報の流通、注意の配分、社会的評価を左右する。推薦システムやランキング、フィードの表示順は、利用者にとって中立的に見えながら、実際には行動を誘導し、規範を形成する。このような統治はしばしば不可視的であり、責任の所在が曖昧になる点が問題とされる。

In algorithmic governance, decision-making processes—such as content recommendation, visibility, ranking, or access—are delegated to computational systems. These algorithms shape social order by structuring what users see, know, and engage with. Although they appear objective or neutral, algorithms embed values and interests, raising concerns about power, accountability, and transparency in contemporary societies.

B)　citizen media 市民メディア

シティズン・メディア（市民メディア）とは、専門的なメディア機関ではなく、一般市民によって制作・運用されるメディア実践を指し、オルタナティブな視点の表現、参加の促進、支配的な権力構造への挑戦を目的とすることが多い。メディア研究においては、エンパワメントや文化的シティズンシップを重視するクレメンシア・ロドリゲス、参加型文化を論じたヘンリー・ジェンキンズ、ネットワーク型コミュニケーションと草の根的政治行動を結びつけたマニュエル・カステルらが代表的な論者である。

Citizen media refers to media practices produced by ordinary people rather than professional institutions, often to express alternative viewpoints, enable participation, or challenge dominant power structures. In media studies, the concept is associated with Clemencia Rodríguez, who emphasizes empowerment and cultural citizenship, Henry Jenkins, who highlights participatory culture, and Manuel Castells, who links networked communication to grassroots political action.

C) COMMON SENSE

メディア・文化・社会研究において「常識」とは、日常生活を支配している、批判的に検証されることのない当然視された信念を指します。それは普遍的な真実というよりも、権力を持つグループの利益を補強する社会的な構築物です。例えば、「継続的な経済成長は常に善であり、必要不可欠である」という考えは、実際には政治的・環境的な一つの選択肢であるにもかかわらず、メディアではしばしば単純な「常識」として提示されます。常識の重要性は、それがイデオロギー闘争の場として機能する点にあります。メディアは特定の概念を「自然なもの」として固定し、「世の中とはそういうものだ」と思わせる役割を果たしています。これを分析することで、研究者は、現状を唯一の「自然な」姿として受け入れる人々の同意によって、どのようにヘゲモニー（覇権）が維持されているかを明らかにできるのです。

In media, cultural and social studies, "common sense" refers to the uncritical, taken-for-granted beliefs that dominate everyday life. Rather than being universal truths, common sense is a social construction that often reinforces the interests of powerful groups. For example, the idea that "continuous economic growth is always good and necessary" is often presented in the media as simple common sense, even though it is a specific political and environmental choice. Its importance lies in how it functions as a site of ideological struggle; the media plays a role in "fixing" certain ideas as natural, making them seem like "just the way things are." By analyzing this, researchers uncover how hegemony is maintained through the consent of people who accept the status quo as the only "natural" way for society to be.

D) cultural hegemony　文化的覇権

アントニオ・グラムシが用いた概念。支配層が暴力や物理的な強制によってではなく、文化を用いて多様な社会成員の合意を取り付け、権力を掌握すること。それにより、人々は支配階級の利益になる考え方や生活様式を、自らの欲望として受け入れ、自発的に服従するようになる。例えば、広告は商品の消費によって幸福を実現している人々のイメージを広げる一方で、生産過程における労働搾取や環境破壊を隠して、消費社会を肯定するように仕向ける。

According to Antonio Gramsci, cultural hegemony is a means by which the ruling class maintains power not through violence or physical coercion, but through culture, by securing the consent of diverse social groups. Under cultural hegemony, people come

to accept ideas and ways of life that serve the interests of the ruling class as their own desires, and they voluntarily comply with them. For example, advertisements promote images of happiness achieved through consumption while obscuring the realities of labor exploitation and environmental distraction, thereby reinforcing consumerism.

E) fragmented consumption　断片化されたメディア消費

デジタルメディア環境においては、ニュース、物語、映像、意見などが、アルゴリズムによって細分化され、個別に配信される。その結果、受け手は文脈や全体構造を把握する前に、部分的・即時的な情報消費を行うようになる。このような消費形態は、意味の統合や批判的理解を困難にし、メディア経験を断片的なものにする。

In contemporary digital media environments, content is increasingly distributed in fragmented forms—such as short clips, headlines, or algorithmically selected posts—across multiple platforms. As a result, users encounter information in isolated segments, often detached from its original context or production logic. This fragmentation reshapes how meaning is constructed and challenges sustained, critical engagement with media texts.

F) RECONTEXTUALIZATION

メディア・文化・社会研究において「再文脈化（recontextualization）」とは、ある要素（引用、画像、あるいは社会的慣習など）が元の文脈から取り出され、新しい文脈の中に配置される過程を指します。メディア・テキストの意味は固定されたものではなく、その周囲の状況（文脈）によって変化するため、このプロセスは非常に重要です。例えば、政治家の演説が風刺ニュース番組やソーシャルメディアのミームの中で再文脈化されると、その意図された影響力は完全に変質してしまいます。研究者がこの過程を分析するのは、メディアにおける権力行使のあり方を理解するためです。出来事を再文脈化する権限を持つ者は、多くの場合、物語（ナラティブ）を支配し、大衆が「現実」をどのように認識するかを決定づける力を持っているからです。

In media, cultural and social studies, recontextualization refers to the process by which an element (such as a quote, an image, or a social practice) is taken out of its original context and placed into a new one. This is significant because the meaning of a media text is not fixed; it changes based on its surroundings. For example, a politician's speech may be recontextualized within a satirical news program or a social media meme, completely altering its intended impact. Researchers analyze this process to understand how power is exercised in the media, as those who have the authority to recontextualize

events often control the narrative and determine how the public perceives "reality."

G) social constructivism 社会構築主義

社会構築主義とは、知識や意味が客観的に発見されるものではなく、社会的相互作用や言説、歴史的に位置づけられた実践を通じて生成されるとする理論である。メディア研究においては、ピーター・L・バーガー／トーマス・ルックマン（現実の社会的構築）、スチュアート・ホール（表象理論・エンコーディング／デコーディング）、ミシェル・フーコー（言説・権力・知）などが代表的であり、メディア制度やテクストが「現実」として何が成立するのかをいかに形づくるかを重視する。

Social constructivism holds that knowledge and meaning are produced through social interaction, discourse, and historically situated practices rather than discovered as objective truths. In media studies, this perspective is associated with thinkers such as Peter L. Berger and Thomas Luckmann (social construction of reality), Stuart Hall (representation and encoding/decoding), and Michel Foucault (discourse, power, and knowledge), who emphasize how media institutions and texts shape what counts as reality.

H) technological determinism 技術決定論

技術決定論（テクノロジカル・デターミニズム）とは、技術的革新が社会的・文化的・歴史的変化を主導し、人々の思考様式、コミュニケーションのあり方、社会の組織形態を規定するとする立場である。メディア研究においては、メディアの形式が知覚を形成すると論じたマーシャル・マクルーハン、時間・空間に偏りをもつメディアを重視したハロルド・イニス、メディア技術が言説や知の条件を規定するとしたフリードリヒ・キットラーが代表的な論者である。

Technological determinism is the view that technological innovations drive social, cultural, and historical change, shaping how people think, communicate, and organize society. In media studies, it is commonly associated with Marshall McLuhan, who argued that media forms shape perception, Harold Innis, who emphasized time- and space-biased media, and Friedrich Kittler, who stressed how media technologies condition discourse and knowledge.

I) toxic masculinity 有害な男性性

覇権的男性性を構成する要素には、「男は泣くものではない」といった感情の抑制や、女性蔑視や性的な搾取、同性愛嫌悪も含まれることがある。このような側面が抑うつなどの精神疾患、いじめや暴力につながるとして、有害な男性性と名付けられている。映画やテレビ、漫画も男性キャラクターの力による支

配を強調し、女性を物象化したり、同性愛を否認してきた。メディアも有害な男性性の再生産に関与してきたといえる。

Elements that constitute hegemonic masculinity often include emotional suppression (e.g. “boys don’t cry”), misogyny, sexual exploitation, and homophobia. These traits are critically conceptualized as toxic masculinity because they can contribute to mental problems such as depression, as well as bullying and violence toward others. Films, television, and cartoons have also emphasized male characters’ dominance through physical force, the objectification of women, and the disavowal of homoeroticism. In this way, media have played a significant role in reproducing toxic masculinity.

J) overdetermination 重層的決定

もともとはフロイトの精神分析の概念であったが、アルチュセールが社会構造の決定要因を論じるなかで応用した。重層的決定を文化研究に適用するとき、文化的現象は経済や政治なども含む相互関連した複数の要因によって引き起こされるが、文化やイデオロギーは相対的自律性を持つものとして理解される。例えば、日本でバレンタインデーに女性が男性にチョコレートを贈る習慣を、ジェンダーの政治、贈答の儀礼や、(ポスト)植民地主義的・資本主義的文脈における商品化と流通によって形作られたチョコレートの象徴性という視点から、考察することができる。

Originating in Sigmund Freud’s psychoanalysis, Louis Althusser adopted the concept of overdetermination to explain how social structures are shaped by multiple determining factors. In cultural studies, this concept allows scholars to understand cultural phenomena as the result of interacting factors, including economy and politics, while culture and ideology operate with relative autonomy. For example, the Japanese custom of women giving chocolate to men on Valentine’s Day can be examined through the lenses of gender politics, gift-giving rituals, the symbolism of chocolate shaped through the commodification and marketing of chocolate within a (post)colonial and capitalist context.

問２－１

The erasure of complex intertextuality in media production has both functional benefits and critical drawbacks for the audience. In terms of the benefits, this erasing provides audiences with seamlessly professional media texts. By presenting news or documentaries as finished, "prefabricated" products, the media allows the audience to consume information efficiently without being distracted by the messiness and complexity of its

construction, such as the negotiations over access to sources and locations or the technicalities of film and audio recording and editing. This creates a sense of immediacy and authority, making the content easier to digest as a coherent narrative.

However, the negative consequence of such erasure is a significant loss of transparency regarding how mediated “reality” is constructed. When the intertextual chains—the various connections between sources, researchers, presenters and editors—are hidden, the audience may fail to recognize the subjective choices or institutional biases involved in the "assembly line". This invisibility can lead to a passive and uncritical consumption of information, where the audience perceives a constructed media text as an objective reflection of reality. Ultimately, while such erasure improves "consumption" efficiency, it obscures the labour and potential manipulation inherent in the production process.

メディア制作における「複雑な間テクスト性（インターテクスチュアリティ）」を消し去る傾向は、視聴者にとって実用的なメリットと重大なデメリットの両方をもたらします。メリットの面では、この消去プロセスによって、視聴者は継ぎ目のないプロフェッショナルなメディア・テキストを享受できます。ニュースやドキュメンタリーを「完成品」として提示することで、メディアは、情報源やロケ地へのアクセス交渉、あるいは映像や音声の録音・編集といった制作上の「煩雑さ」や複雑さに視聴者を煩わせることなく、効率的に情報を消費させることができます。これにより即時性と権威が生まれ、内容を首尾一貫した物語として理解しやすくしています。

しかし、このような消去がもたらす負の結果は、媒介された「現実」がいかに構築されているかという点に関する透明性が著しく失われることです。情報源、リサーチャー、プレゼンター、編集者の間の多様なつながりである「間テクスト的な連鎖」が隠されると、視聴者は「組み立てライン」に含まれる主観的な選択や組織的なバイアスを認識できなくなる可能性があります。この不可視性は、情報の受動的で非批判的な消費を招き、視聴者が構築されたメディア・テキストを客観的な現実の反映であると誤認することにつながります。結局のところ、このような消去は「消費」の効率を高める一方で、制作過程に固有の労働や潜在的な操作を不明瞭にしているのです。

問２－２

Scannell’s concept of "doubling" describes how a public event happens in two places at once: the actual location and the place where a broadcast of it is being watched. At the

time when Scannell was writing, this usually meant a professional radio or TV crew recording or filming an event for an audience listening or watching at home in their living rooms. However, social media has changed this dynamic in at least two ways.

Firstly, for example, a fan at a Taylor Swift concert today can livestream the show from their smartphone. This means the fan is no longer just a consumer but has also become a producer, creating a second "doubled" space for their followers. While there is still a "considerable distance" for most viewers of such content, it is now possible for someone standing right next to the livestreaming fan—or even Taylor Swift herself on stage—to view that content, effectively collapsing the distance between the "addresser" and "addressee".

Secondly, the modern audience of the fan's livestreamed content is no longer anchored to a TV set in their homes. People can consume these "doubled" events while commuting or in other public spaces, creating a more dynamic version of doubling.

Thus, while technology still "mediates" the experience of a live event for distant audiences, the rise of social media has begun to shift the balance of power from professional organizations to individuals, allowing for a "live" experience that can be shared across—or even within—the original site of the event.

スキャネルの「二重化（ダブリング）」という概念は、公的な出来事が、実際の場所と、その放送が視聴されている場所の２か所で同時に起きることを指します。スキャネルが執筆していた当時は、通常、プロのラジオやテレビのクルーがイベントを記録・撮影し、それを視聴者が自宅の居間で聴いたり見たりすることを意味していました。しかし、ソーシャルメディアは少なくとも２つの方法でこのダイナミクスを変化させました。

第一に、例えば今日のテイラー・スウィフトのコンサートでは、ファンがスマートフォンからショーをライブ配信できます。これは、会場にいるファンがもはや単なる消費者ではなく制作者にもなり、フォロワーのために第二の「二重化された」空間を作

り出していることを意味します。多くの場合、依然として物理的な「かなりの距離」は存在しますが、配信者のすぐ隣にいる人や、テイラー・スウィフト本人がステージ上でそのコンテンツを視聴することが可能になり、送り手と受け手の間の距離を事実上消滅させています。第二に、ファンによるライブ配信コンテンツの現代の視聴者は、もはや自宅のテレビの前に固定されていません。人々は、通勤中や他の公共の場所にいる時でも、これらの「二重化された」出来事を消費できるようになり、よりダイナミックなバージョンの二重化が生まれています。したがって、通信技術が依然として遠方の視聴者のために「ライブ」イベントの体験を「媒介」していることに変わりはありませんが、ソーシャルメディアの台頭は、主導権をプロの組織から個人へと移し始め、「ライブ」体験がイベントの元の場所からはるか遠く、あるいはその会場内においてすらも、共有されることを可能にしたのです。

問3

本文において筆者は、テレビ視聴の「量」ではなく「視聴スタイル」に注目し、それが市民参加やコミュニティへの関与と関連している可能性を示唆している。その主張の強みは、単純な時間消費論に還元せず、行為の質に着目した点にある。とりわけ、習慣的視聴が選択的視聴に比べて市民的参加と負の相関を持つという指摘は、メディア利用が社会関係資本の形成に及ぼす影響を具体的に捉えている点で説得力がある。また、教育水準などの人口統計学的要因を統制した上で分析している点も、議論の信頼性を高めている。

一方で、筆者自身も認めているように、因果関係については慎重であるべき限界がある。テレビ視聴が社会的つながりを弱めるのか、もともと社会的関与の低い人が習慣的視聴に陥りやすいのかは、本文からは断定できない。また、チャンネル・サーフィンと人間関係の流動化との関連についても、比喩以上のものである可能性を示唆するにとどまり、実証的裏付けは十分とは言えない。

この議論を現代のデジタルメディアに当てはめると、その妥当性は一定程度保たれると考えられる。SNS や動画配信サービスにおける断片的・常時接続型の利用は、本文でいう習慣的視聴やチャンネル・サーフィンと類似した特徴を持つ。しかし同時に、デジタルメディアは双方向的であり、新たな社会的つながりを生み出す可能性もある点で、テレビとは異なる側面も持つ。したがって、本文の議論は現代にも示唆的であるが、そのまま適用するのではなく、メディア環境の質的変化を踏まえた再検討が必要である。

In the passage, the author focuses not on the *amount* of television viewing but on *styles of viewing*, suggesting that these may be related to levels of civic participation and

community engagement. The strength of this argument lies in its refusal to reduce media use to a simple matter of time consumption; instead, it emphasizes the qualitative dimensions of media practices. In particular, the claim that habitual viewing shows a negative correlation with civic participation when compared to selective viewing is persuasive, as it concretely captures the ways in which media use may affect the formation of social capital. Furthermore, the author's decision to control for demographic variables such as educational attainment enhances the credibility of the analysis.

At the same time, as the author acknowledges, there are important limitations that require caution with regard to causal interpretation. It cannot be determined from the text whether television viewing weakens social ties, or whether individuals with lower levels of social engagement are more likely to engage in habitual viewing. Similarly, the suggested connection between channel surfing and the fluidity of human relationships remains largely metaphorical, as the argument stops short of providing sufficient empirical evidence.

When applied to contemporary digital media, the core of the argument can be said to retain a certain degree of validity. Fragmented and always-on forms of engagement on social media and streaming platforms share important similarities with the habitual viewing and channel surfing described in the text. At the same time, however, digital media differ from television in their interactive nature and in their potential to generate new forms of social connection. For this reason, while the argument remains suggestive for understanding present-day media practices, it requires reconsideration in light of the qualitative transformations of the media environment.

分野・専門名：　メディア文化社会論

試験科目：　　メディア文化社会論

【出題の意図】

論述問題１―A　基本的な用語の理解をもとに、メディア研究若しくは文化学研究についての知識と理解を問う問題。

論述問題１―B　基本的な用語の理解をもとに、メディア研究若しくは文化学研究についての知識と理解を問う問題。

論述問題１―C　基本的な用語の理解をもとに、メディア研究若しくは文化学研究についての知識と理解を問う問題。

論述問題１―D　基本的な用語の理解をもとに、メディア研究若しくは文化学研究についての知識と理解を問う問題。

論述問題１―E　基本的な用語の理解をもとに、メディア研究若しくは文化学研究についての知識と理解を問う問題。

論述問題１―F　基本的な用語の理解をもとに、メディア研究若しくは文化学研究についての知識と理解を問う問題。

論述問題１―G　基本的な用語の理解をもとに、メディア研究若しくは文化学研究についての知識と理解を問う問題。

論述問題１―H　基本的な用語の理解をもとに、メディア研究若しくは文化学研究についての知識と理解を問う問題。

論述問題１―I　基本的な用語の理解をもとに、メディア研究若しくは文化学研究についての知識と理解を問う問題。

論述問題１―J　基本的な用語の理解をもとに、メディア研究若しくは文化学研究についての知識と理解を問う問題。

長文読解問題２－１　指定された文章の理解を踏まえて文章全体の大意を把握する力、また理解したことを分かりやすく説明できる表現力を問う問題。

長文読解問題２―２　メディア研究における理論的概念を現実の事例に応用する能力を試す設問。

長文読解問題３　筆者の主張の強みと限界を評価し、事例に応用する能力を試す設問。